

歴史を学び、研究する場合、気をつけねばならないことに客観と主観をどのように考えたらよいかということがあります。歴史を対象としようとする私の主観はどこまで打ち出せるのかとか、対象としている歴史の客観性をどこまで整えなくてはいけないかなどです。そして、主観と客観の問題は更なる難問に我々を導きます。

対象とした歴史または歴史的事実は物理的事実と違って、いつでもどこでも起こり得るものではないために特殊的、個別的であり、年代的にみればある時代に固有でだから時代的であり、風土的にみればある文化に固有だから文化的なことがらなのです。つまり、歴史を研究することはある時代がある時代を見ること、ある文化がある文化を見ることなのです。このことは更なる注意事項を喚起します。歴史を研究することはある時代がある時代を裁くこと、ある文化がある文化を裁くことになりかねないのです。

私と対象（歴史）は単に向かい合う対等な関係ではありません。私は 20 世紀という時代の日本という文化の中にいます。対象とした歴史もまた同じように、その時代とその文化の中にありました。私が古代メソポタミア医学や 19 世紀のアメリカ歯学を研究する場合、私の研究の姿勢の中に知らずして私の 20 世紀の日本の判断基準を入り込ませて研究しているかも知れないということに気をつけることは重要なことです。

そしてすぐに気がつくことですがこのことは日本人の私が日本の歴史を研究する場合にも生じることなのです、日本の美術史を研究する場合、仏像彫刻や仏画を技法的に、または中国や朝鮮との関連の中で、または他の芸術分野からの影響の中で論じるだけであれば仏像彫刻や仏画は単に美術工芸の技術論であり、そのものがもつ本来の救いの意味は飛んでしまいます。当時の人々がどのような気持ちで製作し、またその前でどのように振る舞ったかが考察されなくてははいけません。はたして 20 世紀に生きる私が薬師如来を前にした天平の人々の気持ちを推し量ることができるかということになるといささか疑問にはなりますが、しかし、このような心構えは歴史観に大きく影響をします。時代と文化を異なえるものが他の時代と文化を考察する場合に何が注意されねばならないか。これは重要なことなのです。

歴史における主観と客観は現在時称における平面的な考察だけでは済まされないのです。時間軸と文化軸とを交えた遠近法の中で考察されなくてはなりません。私自身の主観や私が考えている客観がこの遠近法の中で本当にそれを主観と考えてよいか、本当にそれを客観と考えて良いかが再考される必要があります。知らずして先入観で物事を判断しているのではないか、知らずして偏見でもって理解したと思っっているのではないか。このことを強く叫んだのは現象学という哲学の分野を提示した E. フッサールでした。彼は一切の理解を白紙に戻し、理解の再構築を計ろうとしました。フッサールはこれを現象学的還元と言いました。

フッサールは理解がどのようにして我々の精神の中に形成されるのかを追求して、科学論理だけで成立する基盤の脆弱さを指摘したのです。なんと多くの理解がそれに先立つ理解されざる理解の基盤の上に構築されていることか。歴史を理解しようとする私が私の内部でいかに先入観と偏見でもって歴史に挑んでいたことか。

エジプトのピラミッドも古代奴隷制や搾取 - 被搾取という今日概念から理解しようとするればおそらく当時の人々の気持ちは理解できないでしょう。このような歴史へのアプローチは決して

新しいものではありません。

「あなたの立場からではなく、過去の人々の立場から過去の歴史を理解すべきである」ことを強調したのはイタリアの歴史家で『新しき学』を著わしたヴィーコでした。私の立場を消し去り、過去の人々の心情の中に直接的に飛び込むこと即ち感情移入をする必要を訴えたのです。このヴィーコの姿勢に私は現象学の持つ新鮮さを感じました。

もっばら現在の事象にのみ適応されている現象学を歴史にも適応させてみればどうなるでしょうか。先入観を排除し、偏見を正す。私自身を無にして私自身に立ち向かい、歴史に立ち向かう。これは新しい私自身の発見であり、新しい歴史の発見です。先入観と偏見に気付いた私がまだ先入観と偏見に気付いていない私を鳥瞰している新しいステージの誕生です。

気付いた私とまだ気付かない私を併せ持つ私は精神の中で2重構造となっています。そしてこれまたよく考えてみれば過去の歴史を形成した人々もその時代と文化の中で先入観と偏見の中であらうごめいた人たちでした。歴史を研究することは今の時代のこの文化の中の2重構造から過去の時代の文化の2重構造を読み解くことなのです。ですから、歴史を研究することは私自身にこびりついている先入観と偏見を明確にすること、並びに、対象とした歴史を形成した人々の当時の先入観と偏見がどうであったかもまた明確にすることです。

歴史学は人間というものが時代と文化という状況の中でどのように先入観と偏見にはまり込んでいくものかを解きあかす学問ということもできるでしょう。我々が陥ったように過去の人々もまた陥ったに違いありませんし、過去の人々が陥ったように現在の我々もまた陥っているに違いありません。

ですからこれは単なる感情移入ではありません。感情移入しようとする過去の人々の心情もまた時代と文化に拘束されていることが分かった感情移入でなければならないのです。

過去への現象学的還元だけではなく、過去からの現象学的還元をも要求される感情移入なのです。「過去は本当は如何であったか？」ランケのポストは皮相な実証歴史や超越論的科学的歴史に流入するのではなく、本当の過去そのものに行き着くために現象学的歴史主義なるものが考えられてもよいのではないのでしょうか？ この姿勢は正に20世紀の『新しき学』です。

